

◆ [ISWA World Congress 2016] 参加報告 国際部・調査部

2016年9月19日～21日の間にセルビア、ノヴィサド市で開催されたISWA World Congress 2016に、JWセンターの調査成果である日本の焼却処理の現状を発表するために参加しました。その概要を紹介します。

1. 概要

ISWA World Congress 2016には、74カ国から1,300名以上の廃棄物に関する研究者等の参加がありました。会場は口頭発表、ポスター発表を行う部屋に加え、企業展示のブースが設けられ大規模なものでした（写真1）。

発表はおよそ300題あり、多くのセッションで各種リサイクルを発展させた「サーキュラエコノミー」や開発途上国の「オープンダンピング対策」をキーワードとした研究内容が発表されているという印象がありました。



写真1 展示場の様子

2. 口頭発表

口頭発表会場は100名規模の部屋（写真2）が7つ設けられていました。JWセンターからの発表は、2日目の午後「THERMAL WASTE TREATMENT」のセッションで「PRESENT STATE OF THERMAL TREATMENT OF MUNICIPAL WASTE AND INDUSTRIAL WASTE IN JAPAN」を行いました。内容は、都道府県政令市等へ実施した産業廃棄物焼却施設に関するアンケート調査の結果を取りまとめたもので、主に以下の点を報告しました。



写真2 口頭発表会場の様子

- ① 日本全体で、約4,400の焼却炉があり、内訳は、45%が産業廃棄物の焼却炉で55%が一般廃棄物焼却炉であった。
- ② 一般廃棄物の焼却炉は、連続式のストーカ炉で50t/日以上の大規模な施設である一方、産業廃棄物の焼却炉は、30t/日以下の比較的小規模で多様な炉形式で対応していた。
- ③ 年間に約5,800万tの廃棄物が焼却され、約40%が産業廃棄物焼却炉で処理されていた。セメント製造施設の60施設だけで産業廃棄物焼却量の40%を占めており、セメント産業の産業廃棄物の適正処理と再利用への貢献度の高さが示された。

3. 他研究機関の発表例

多くの発表の中から、電子情報、ネットワークを使った廃棄物管理に関する研究発表を紹介します。ICT（情報通信技術）は、廃棄物の収集箇所の排出頻度や排出量などの情報を効率的に活用できるので、自治体のごみ処理計画を策定するのに役立つと紹介されました。そのほか、GIS（地理情報システム）と統計的な分析手法を使って効率的な最終処分場運用管理を実施しようとする発表でした。

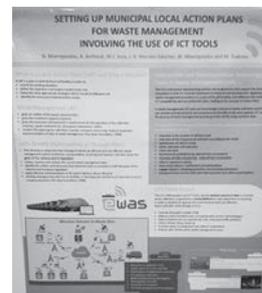


図 ICT技術を活用した事例

4. おわりに

本会議を通じ海外機関の研究動向の把握や研究者等との交流が図られました。JWセンターでは今後も積極的に外部への情報発信に努めていきます。2017年の会議は9月25日から27日にかけてアメリカのボルチモアで開催される予定です。